話 題

「ワカサギに学ぶ会」について

隼野寛史,^{1*} 大浜秀規,² 鳥澤 雅,³ 坂崎繁樹⁴

¹(地独)北海道立総合研究機構さけます・

内水面水産試験場, ²山梨県水産技術センター,

³(地独)北海道立総合研究機構栽培水産試験場,

⁴網走市水産港湾部

Summary of “The study meeting of Wakasagi smelt”

HIROFUMI HAYANO,^{1*} HIDEKI OOHAMA,²

MASARU TORISAWA,³ AND SHIGEKI SAKAZAKI⁴

¹Salmon and Freshwater Fisheries Research Institute, Hokkaido Research Organization, Eniwa, Hokkaido 061-1433,

²Yamanashi Prefectural Fisheries Technology Center, kai, Yamanashi 400-0121, ³Mariculture Fisheries Research

Institute, Hokkaido Research Organization, Muroran, Hokkaido 051-0013, ⁴Fisheries and Harbor Department,

Abashiri City, Abashiri, Hokkaido 093-8555, Japan

全国のワカサギ研究を対象とした成果発表や話題提供、情報交換の場として「ワカサギに学ぶ会」が開催されています。この研究会はもともと任意参加の会合としてはじまり、規約上例会などは特に設けられていませんでしたが、主要なワカサギ生産地を中心に都道府県の水産試験場が事務局を持ち回りしながら、今年度で15回目を迎えることになりました。途中、若干の休会期間もありましたが、昨年度（第14回「ワカサギに学ぶ会」、開催地：山梨県）には規約が改正されてまた新たなスタートを切ることになります。ひとつの節目として、当研究会が発会した経緯とこれまでに発表された研究課題および発表者（表1）について、本頁をお借りして紹介させて頂きたいと思います。執筆にあたり、資料提供を賜りました群馬県農政部の久下敏宏博士に厚く御礼申し上げます。

「網走のワカサギに学ぶ会」誕生

北海道オホーツク海沿岸の網走市において、1994年4月21日、第1回「網走のワカサギに学ぶ会」が開催されました。これが当研究会の起源となりました。網走市は4つの海跡湖（網走湖、能取湖、藻琴湖、濤沸湖）とオホーツク海の恵みを楽しむ道内屈指の水産都市です。特に、内水面漁業においては全道の80%以上を生産する最重要地域となっており、なかでも、網走湖は漁

業生産に加えてワカサギの種卵供給を担う基地として、全国的にも極めて貴重な湖となっています。発会当時の網走では、道立の網走水試、水産孵化場、環境科学センターや道開発局、大学などが漁協や地元関係者のサポートを受けながら、それぞれ独自に網走湖の環境やワカサギを対象とした調査、研究に取り組んでいました。しかし、これらの中には共通するデータや同様なフィールドワークを伴う課題が多くあり、サポートする側としてみれば決して効率の良いものではありませんでした。何よりも進捗状況や問題点などの情報を共有する場がないため、作業の効率化など全体的な調整を図ることがとても困難な状況にありました。これは同じフィールドで研究活動を行う者同士、無駄が多く極めて残念なことです。

一方、地元の漁業者は網走湖を中心とした一連の調査や研究に対して大きな期待を寄せていました。網走湖は歴史的にワカサギとの関わりが深く、1924年には道内で初めて人工孵化放流に取り組んでおり、資源管理においても早くからプール制共同操業を取り入れるなど常に先進的な試みを実践してきた地域です。また、漁業者は網走水試や網走市の協力を受けながら独自に漁場環境や資源のモニタリングを実施しており、各機関が行う調査や研究結果に対しても大に関心を抱いているところでした。

このような背景のもと、網走水試と網走市が中心となり、濱田啓吉北大名誉教授を顧問に迎えて「網走のワカサギに学ぶ会」を立ち上げることとなり、その後6年間（第1回～第6回）に亘って網走市で会合が開催されてきました。発会当時の会則では「会員の自由な情報交換に基づき、網走のワカサギから共に学ぶこと」を目的とし、参加資格は「網走のワカサギに興味を持ち、自らこれに学ぼうとする者であればだれでも本会への参加資格を有する」とあります。実際には、道内の水試、水産孵化場、水産指導所、漁協、漁業者、支庁、市町村、大学、道開発局、道栽培公社、民間調査会社などのほか、道外の水試、漁協、大学などさまざまな機関から多くの会員が集まりました。会合では、参加者による話題提供とそれに基づく論議を中心に、懇親会などを交えながら濃密な情報交換が行われ、これを契機に異なる機関同士での共同調査や研究活動も生まれました。

網走から全国へ

回を重ねるごとに道外からの参加者が増え、話題も網走湖を対象としたものからその他の主産地に関わる内容へと広がりを見せるようになって行きました。また同時

* Tel : 81-123-32-2135. Fax : 81-123-34-7233.

Email : hayano-hirofumi@hro.or.jp

表1 「(網走の) ワカサギに学ぶ会」において発表された課題名と発表者

発表課題名		発表者(所属*)
第1回 「網走のワカサギに学ぶ会」	開催日: 1994年4月21日	開催地: 網走市(網走セントラルホテル)
1. ワカサギ—その分類と生態—		濱田啓吉(北大名誉教授)
2. 網走湖産ワカサギの生活史と資源動態		宇藤 均(稚内水試)
3. 網走における汽水湖およびワカサギ研究の現状と今後の展望		浅見大樹(道孵化場)
4. 網走湖におけるワカサギ漁業		川尻敏文(西網走漁協)
5. キュウリウオ科魚類の成熟と卵生産について		山中 薫・桑原 連・篠崎真一(東農大生物産業)
6. シンシャモの大量孵化技術		楠田 聡・寺西哲夫(道孵化場)
第2回 「網走のワカサギに学ぶ会」	開催日: 1995年3月9日	開催地: 網走市(網走セントラルホテル)
1. 網走湖におけるワカサギ(<i>Hypomesus transpacificus nipponensis</i>) 仔稚魚の生産過程について		浅見大樹(道孵化場)・川尻敏文(西網走漁協)
2. 涛沸湖におけるワカサギ(<i>Hypomesus transpacificus nipponensis</i>) の分布生態について		浅見大樹(道孵化場)・小林耕一・岡田圭生(網走漁協) ・千田耕平(網走水産科学セ)・瀧口俊生・松崎 栄 (東農大生物産業)・松本好弘(北大理)
3. 涛沸湖産ワカサギの分布と移動に関する調査, 研究		桑原 連・瀧口俊生(東農大生物産業)・浅見大樹(道 孵化場)・小林耕一(網走漁協)・篠崎真一(東農大生物 産業)
4. 霞ヶ浦におけるワカサギ資源動向		根本 孝(茨城内水試)
5. ワカサギの成熟に関する研究		篠崎真一・山中 薫・桑原 連(東農大生物産業)・ 寺西哲夫(道孵化場)
6. ワカサギの成熟に関する研究—Ⅲ網走湖産ワカサギの生殖周期 に伴う血中ピテログレニン量の変動		篠崎真一(東農大生物産業)・坂崎繁樹・千田耕平(網 走水産科学セ)・川尻敏文(西網走漁協)・浅見大樹(道 孵化場)・桑原 連(東農大生物産業)・寺西哲夫(道孵 化場)
7. 涛沸湖の採卵親魚と人工孵化について		千田耕平(網走水産科学セ)
8. 網走地域におけるワカサギの産卵場について(緒言編)		新居久也(道栽培公社)
9. 日本産キュウリウオ科魚類の電気泳動		山中 薫・桑原 連(東農大生物産業)
10. 石狩川水系のシラウオについて		山口幹人(道中央水試)
第3回 「網走のワカサギに学ぶ会」	開催日: 1996年3月5日	開催地: 網走市(網走セントラルホテル)
1. 涛沸湖におけるワカサギの分布生態について その2 —特に仔魚期および稚魚期での湖内分布について—		浅見大樹(道孵化場)・柳沢三郎(東農大生物産業)・ 岡田圭生・中川政明・小林耕一(網走漁協)・坂崎繁樹 ・千田耕平(網走水産科学セ)
2. 涛沸湖産ワカサギの湖口移動に関する調査・研究		桑原 連・近藤豊彦(東農大生物産業)・小林耕一(網 走漁協)・坂崎繁樹・千田耕平(網走水産科学セ)・浅見 大樹(道孵化場)
3. 鱗相からみた涛沸湖のワカサギの生活(予報)		根岸貴之(東農大生物産業)・小林耕一・岡田圭生・ 中川政明(網走漁協)・千田耕平・坂崎繁樹(網走水産 科学セ)・浅見大樹・河村 博(道孵化場)
4. 網走湖産ワカサギの鱗紋形成過程(予報)		鳥澤 雅(道網走水試)・川尻敏文(西網走漁協)
5. 霞ヶ浦北浦におけるワカサギの昨年の状況について		久保田次郎(茨城内水試)
6. 網走湖と涛沸湖産ワカサギのミトコンドリア DNA のゲノム型 組成の分化		沼知健一・辰野光洋・大西俊彦(東海大海洋)
7. 網走湖産ワカサギの成熟パターン		篠崎真一(東京都)・川村洋司・寺西哲夫(道孵化場)
8. 網走湖産ワカサギの生活第1年目における成熟群と非成熟群の 分岐		宇藤 均(稚内水試)
9. ダム湖におけるワカサギの産卵環境		新居久也(道栽培公社)
10. 網走湖産ワカサギ仔魚期の形態発生的研究		山中 薫・桑原 連・岩内 仁(東農大生物産業)
11. 網走湖におけるワカサギの湖沼生態—特に初期生活について—		浅見大樹(道孵化場)・野内 功(東農大生物産業)・ 川尻敏文(西網走漁協)
12. 日齢から見た網走湖産ワカサギの降海行動		松本好弘(北大理)
13. 網走湖におけるワカサギ遡河回遊群と湖中残留群の形態的特徴		虎尾 充・桑原 連・山中 薫(東農大生物産業)
14. 石狩川のシラウオについて <2> 繁殖生態		山口幹人(道中央水試)

表1 「(網走の) ワカサギに学ぶ会」において発表された課題名と発表者(つづき)

発表課題名		発表者(所属*)
第4回 「網走のワカサギに学ぶ会」	開催日: 1997年3月4日	開催地: 網走市(網走セントラルホテル)
1. ここまでわかった!? 涛沸湖のワカサギの生活史		浅見大樹(道孵化場)
2. 知恵かして下さいー涛沸湖のワカサギ調査について		岡田圭生・中川政明・小林耕一(網走漁協)
3. 鱒浦沿岸域で採捕されたワカサギの胃内容物調査		桑原 連・山中 薫・虎尾 充(東農大生物産業)
4. 網走湖のワカサギの形態的多型 1. 多変量解析による形態判別		虎尾 充(東農大生物産業)・今田和史(道孵化場)
5. 網走湖におけるワカサギの形態的多型 2. 生態的意味および資源		虎尾 充・桑原 連(東農大生物産業)・今田和史(道孵化場)
6. 霞ヶ浦のワカサギに見られる大小二群に関する研究 I. 成長		工藤貴史・水口憲哉(東水大)
7. 霞ヶ浦におけるワカサギの増殖対策について		久保田次郎・熊丸敦朗(茨城内水試)
8. 水生生物の生活史とその教材化に関する研究 ー閉伊川産ワカサギの産卵生態を中心にしてー		佐々木剛(上越教育大・宮古水産高校)
9. ワカサギ属の分類学的再検討		猿渡敏郎(東大海洋研)・J. Andres Lopez・Theodore W. Pietsch(ワシントン大)
10. 網走湖におけるワカサギの越冬生態 ー沖合いと沿岸における垂直分布ー		松本好弘(北大理)
11. 網走湖のワカサギとプランクトンはどんな関係にあるのだろうか?		浅見大樹(道孵化場)・川尻敏文(西網走漁協)
12. 網走湖産ワカサギの湖中残留型・降海型の分岐機構と資源変動メカニズム		鳥澤 雅(網走水試)・川尻敏文(西網走漁協)
13. シラウオの産卵様式についてー飼育実験から得られた示唆ー		山口幹人・藤岡 崇(道中央水試)
第5回 「網走のワカサギに学ぶ会」	開催日: 1998年5月11日	開催地: 網走市(網走セントラルホテル)
1. 漁獲統計資料からみた網走湖産ワカサギの資源変動周期とその原因		鳥澤 雅(道網走水試)・川尻敏文(西網走漁協)
2. 網走湖におけるワカサギ仔稚魚の生態と餌生物環境との関係について		浅見大樹(道孵化場)・川尻敏文(西網走漁協)
3. ワカサギの発育段階と DNA・RNA 量およびタンパク質量の変化		虎尾 充・桑原 連(東農大生物産業)
4. ワカサギとその仲間達の分子系統		猿渡敏郎(東大海洋研)・大原一郎・小林敬典(養殖研)
5. 諏訪湖のワカサギについてーその現状とこれからの課題ー		田原偉成・築坂正美(長野水試諏訪支場)
6. 琵琶湖のワカサギについて		井出充彦(滋賀水試)
7. 十和田湖のワカサギについて		長崎勝康・沢目 司(青森内水試)
8. 閉伊川河口域におけるワカサギの成長		佐々木剛(宮古水産高校)・猿渡敏郎(東大海洋研)
9. 耳石・微量元素に基づく回遊履歴推定の試み		松本好弘(北大理)・大竹二雄(三重大資源生物)
10. ワカサギ産卵場ではなぜ常に雄が多いのか? ーワカサギ産卵生態の雌雄差ー		鳥澤 雅(道網走水試)・川尻敏文(西網走漁協)
11. 石狩川水系におけるシラウオの本流と三日月湖間の移動		山口幹人・藤岡 崇(道中央水試)
12. ワカサギ長期飼育への挑戦・あるいは、江戸前のワカサギの作り方		猿渡敏郎(東大海洋研)
第6回 「網走のワカサギに学ぶ会」	開催日: 2000年3月9日	開催地: 網走市(網走セントラルホテル)
統一テーマ「環境変化とワカサギ」		
1. 統一テーマ「環境変化とワカサギ」趣旨説明		鳥澤 雅(道網走水試)
2. 網走湖産ワカサギの主要餌生物の動態		浅見大樹(道孵化場)・川尻敏文(西網走漁協)
3. ワカサギの孵出パターンとサクラの開花日について		松本好弘(北大理)
4. 網走湖産ワカサギにおける秋期遡上時期の変化と環境要因		鳥澤 雅(道網走水試)・川尻敏文(西網走漁協)
5. 環境変化とワカサギの産卵場		片山知史(東北大農)
6. 十和田湖におけるワカサギの資源変動と湖沼環境との関係		鈴木俊哉・斎藤寿彦(さけ・ます資源管理セ)・木村大(青森内水試)・水谷 寿(秋田水振セ)・埴山雅秀(道東海大)
7. 霞ヶ浦におけるワカサギ資源と漁場環境		久保田次郎(茨城内水試)
8. 榛名湖におけるワカサギの漁況と生息環境に関する調査		久下敏宏(群馬水試)

表1 「(網走の) ワカサギに学ぶ会」において発表された課題名と発表者(つづき)

発表課題名		発表者(所属*)
自由テーマ		
9. 諏訪湖のワカサギ 1989-99		築坂正美(長野水試諏訪)
10. 小川原湖におけるワカサギの湖内滞留群と降海回遊群		片山知史(東北大農)
11. 網走湖産ワカサギ仔魚の日周鉛直分布		浅見大樹(道孵化場)・川尻敏文(西網走漁協)
12. 網走湖産ワカサギの生活史多型と発育段階および栄養状態の関係		虎尾 充(東農大生物産業)
13. シシャモ受精卵の海水管理は可能か? —発眼期の卵黄囊上皮に存在する塩類細胞—		隼野寛史(道孵化場)・金子豊二(東大海洋研)
第7回 「ワカサギに学ぶ会」	開催日: 2000 年 11 月 21 日	開催地: 下諏訪町(ホテル山王閣)
1. 諏訪湖のわかさぎ漁(諏訪湖漁業の概要)		武居 薫(長野水試諏訪)
2. 最近の諏訪湖のワカサギ資源動向について		築坂正美(長野水試諏訪)
3. 画像システムによるワカサギ仔稚魚の孵化日組成と成長率(1998 年の阿寒湖から)		工藤 智・坂本博幸(道孵化場)・浅見大樹(道中央水試)
4. 網走湖産シラウオの生活史について —1998 年および 1999 年調査結果からの推定—		隼野寛史(道孵化場)・川尻敏文(西網走漁協)・浅見大樹(道中央水試)
5. 網走沿岸の環境について		浅見大樹(道中央水試)・川尻敏文(西網走漁協)・岡田圭生(網走漁協)
6. 白神山地・津軽十二湖湖沼群におけるワカサギの体長組成と条虫寄生率の流程変化		大友智和・大高明史(弘前大教育)・小笠原伸治(五所川原農協)・松本好弘(北大理)
7. ワカサギの脊椎骨数の地理的変異		片山知史(東北大農)
8. ふ化仔魚における初期飼料サイズの比較試験		新井 肇(群馬水試)
9. ワカサギ増殖における初期生残率の向上		久下敏宏(群馬水試)
10. 中国におけるワカサギ漁業の展開と現状		王 寧・工藤貴史(東水大)
11. 霞ヶ浦のワカサギにおける加工・流通の現状		工藤貴史(東水大)
12. 霞ヶ浦におけるワカサギの成長について		久保田次郎・谷村明俊(茨城内水試)
13. 網走湖におけるワカサギ水曳き網漁業の操業方法		鳥澤 雅(道中央水試)
第8回 「ワカサギに学ぶ会」	開催日: 2001 年 11 月 22 日	開催地: 霞ヶ浦町(農村環境改善センター)
1. 岩手県閉伊川に生息する遡河回遊型ワカサギの耳石による年齢査定		佐々木剛(宮古水産高)・猿渡敏郎(東大海洋研)・渡邊精一(東水大)
2. ワカサギ精子の保存について		井塚 隆(神奈川水総研内水試)
3. 芦ノ湖におけるワカサギ卵の集約的孵化方法と自然産卵による受精卵採取の新手法について		橘川宗彦(芦ノ湖漁協)
4. 粘着性を除去したワカサギ卵のふ化管理		大浜秀規(山梨水技セ)
5. 「十和田湖におけるヒメマスとワカサギの関係について」		鹿内恭子(青森県水産振興課)
6. ワカサギの降海パターン—生息水域間の比較—		片山知史(東北大院農)・山口幹人・佐藤 一(道網走水試)
7. 網走湖産シラウオの資源動向について		隼野寛史(道孵化場)・川尻敏文(西網走漁協)・浅見大樹(道中央水試)
8. 網走湖産ワカサギ仔魚の餌生物と生き残り		浅見大樹(道中央水試)・川尻敏文(西網走漁協)
9. 霞ヶ浦におけるワカサギ資源変動の主な要因について		熊丸敦朗(茨木内水試)
10. 松原湖産ワカサギの年齢組成		渋谷武久(福島内水試)
11. 宍道湖におけるワカサギ資源の現状		藤川裕司(島根内水試)
12. 諏訪湖における産卵期のワカサギ親魚の河川遡上状況について		上島 剛・田原偉成・落合一彦(長野水試諏訪)
13. わかさぎ卵発信基地としての諏訪湖の今後		中沢 章(諏訪湖漁協)
14. 群馬県におけるワカサギ増殖事業		久下敏宏・新井 肇・中野亜木子・信沢邦宏(群馬水試)
15. ワカサギ増殖 100 年史—霞ヶ浦から日本そして世界へ—		工藤貴史(東水大)
第9回 「ワカサギに学ぶ会」	開催日: 2003 年 3 月 11 日	開催地: 札幌市(道庁赤レンガ庁舎)
1. 北海道のワカサギについて—漁業と遊魚—		坂本博幸(道孵化場)
2. 北海道石狩地方におけるワカサギ人工ふ化放流の改善試験		佐々木義隆(道孵化場)
3. 芦ノ湖におけるワカサギの採卵・ふ化放流方法について		橘川宗彦(芦ノ湖漁協)
4. ワカサギ初期飼育におけるワムシの給餌について		井塚 隆(神奈川水総研内水試)

表1 「(網走の) ワカサギに学ぶ会」において発表された課題名と発表者(つづき)

発表課題名		発表者(所属*)
5. 網走湖におけるワカサギの重要餌生物、イサザアミ (<i>Neomysis intermedia</i>) の生態に関する二、三の知見		浅見大樹(道孵化場)
6. 石狩川水系・河口周辺におけるシラウオ仔稚魚の分布と摂餌		岡田のぞみ(道中央水試)
7. 諏訪湖におけるワカサギの初期生活について		田原偉成(長野水試諏訪)
8. 閉伊川河口域に出現するワカサギ仔魚		佐々木 剛(宮古水産高)・猿渡敏郎(東大海洋研)・渡邊精一(東水大)
9. 網走湖産ワカサギの分布密度と成長率		虎尾 充(道孵化場)
10. 寄生虫を生物指標としたワカサギ個体群の解析		大友智知(北大地環研)
11. 宍道湖における夏季水温とワカサギ、シラウオ漁獲量との関係		藤川裕司(島根内水試)
12. 阿寒湖のワカサギ資源管理について		坂本博幸(道孵化場)
13. ワカサギの資源変動要因について		谷村明俊(茨木内水試)
14. 十和田湖におけるワカサギ資源の変動について		天野勝三(青森内水試)
<hr/>		
第10回「ワカサギに学ぶ会」	開催日: 2003年12月18日	開催地: 三沢市(古牧第四グランドホテル天龍閣)
1. 阿寒湖におけるワカサギ仔魚の餌料環境		浅見大樹(道中央水試)・坂本博幸(道孵化場)
2. 北海道東部太平洋沿岸におけるシシャモ漁業と資源管理		鳥澤 雅(道釧路水試)
3. 耳石ストロンチウム・カルシウム比からみた網走湖産シラウオの生活史		隼野寛史(道孵化場)・新井崇臣(東大海洋研)・川尻敏文(西網走漁協)・佐藤 一(道網走水試)
4. 青森県のワカサギの分布状況について		田村真道(青森水総研セ内水研)
5. 小川原湖のワカサギ漁業について		沼邊武志(小川原湖漁協)
6. ワカサギの相対成長—降海回遊個体0+と湖内滞留個体1+の識別法		片山知史(東北大院農)
7. 岩手県閉伊川における遡河回遊型ワカサギの生活史について		佐々木 剛(宮古水産高)・猿渡敏郎(東大海洋研)・渡邊精一(東京海洋大)
8. ワカサギ・シラウオの産卵場について		谷村明俊(茨城内水試)
9. 芦ノ湖の水槽内自然産卵法による採卵・ふ化状況		橋川宗彦(芦ノ湖漁協)
10. 芦ノ湖における自然産卵法—その特徴と汎用性について—		井塚 隆(神奈川水総研内水試)・大場基夫・橋川宗彦(芦ノ湖漁協)
11. 芦ノ湖における自然産卵法—過去の試行錯誤と確立化へ向けた未来への展望—		小林郁恵(東海大海洋)
12. ワカサギ産卵遡上群の性比について		上島 剛・田原偉成(長野水試諏訪)
13. 宍道湖におけるワカサギ不漁原因の検討		藤川裕司(島根内水試)
<hr/>		
第11回「ワカサギに学ぶ会」	開催日: 2004年11月18日	開催地: 飯田川町(八郎潟ハイツ)
1. 資源をモニターしながら漁業する—網走湖の「資源監視型漁業」		佐藤 一(道網走水試)・川尻敏文(西網走漁協)・隼野寛史・田村亮一(道孵化場)
2. 岩手県閉伊川における産卵遡上ワカサギの生物学的パラメータと環境要因の関係—2		佐々木 剛(宮古水産高)・猿渡敏郎(東大海洋研)・渡邊精一(海洋大)
3. 小川原湖における最近の漁獲動向について		長崎勝康(青森水総研セ内水研)
4. オオクチバスが生息している八郎湖で、ワカサギ漁獲量はなぜ安定しているか		杉山秀樹(秋田水産振興セ)
5. 十和田湖におけるワカサギの摂餌生態		水谷 寿(秋田水産振興セ)
6. 冬季の張網入網量を指標としたワカサギ親魚量の動向		富永 敦(茨城内水試)
7. ワカサギ卵の水カビ病防除方法について		三浦正之(山梨水技セ)・土田奈々(山梨水技セ忍野)・芳賀 稔(山梨水技セ)
8. 人工水路を利用したワカサギの簡易採卵		井塚 隆(神奈川水総研内水試)
9. 芦ノ湖の漁獲量の変動と増殖効果について		橋川宗彦・大場基夫(芦ノ湖漁協)
10. 宍道湖におけるワカサギ、シラウオの産卵特性		藤川裕司(島根内水試)
<hr/>		
第12回「ワカサギに学ぶ会」	開催日: 2005年12月7日	開催地: 北塩原村(裏磐梯猫魔ホテル)
1. ワカサギの生態再考—増やすために知っておきたいこと—		片山知史(水総研セ中央水研)
2. 桧原湖のワカサギ増殖における現状と課題		羽染 忠(桧原湖漁協)
3. 福島県のワカサギについて		佐久間 徹(福島内水試)
4. 鵜川(シシャモ)親魚遡上数と翌年の沿岸稚魚数の関係		工藤 智(道孵化場)・飯岡孝一(鵜川漁協)

表1 「(網走の) ワカサギに学ぶ会」において発表された課題名と発表者(つづき)

発表課題名		発表者(所属*)
5. 2005年度の網走湖産ワカサギ・シラウオの漁獲動向について		隼野寛史・田村亮一・小出展久(道孵化場)・佐藤 一(道網走水試)・川尻敏文(西網走漁協)
6. 霞ヶ浦北浦における2005年のワカサギ好漁について		富永 敦(茨城内水試)
7. 芦ノ湖におけるワカサギ自然産卵法-II ー自然産卵に適した収容親魚の密度と性比についてー		井塚 隆(神奈川水総研内水試)・大場基夫・橘川宗彦(芦ノ湖漁協)
8. 自然産卵法専用水槽の開発について		橘川宗彦・大場基夫(芦ノ湖漁協)
9. 諏訪湖におけるワカサギの産卵について		田原偉成(長野水試諏訪)
第13回「ワカサギに学ぶ会」	開催日:2007年3月14日	開催地:箱根町(小田急山のホテル)
1. 基調講演「緑の保全とワカサギの増殖について」		工藤盛徳(東海大名誉教授)
2. 群馬県におけるワカサギ増殖の問題点		久下敏宏(群馬水試)
3. ワカサギをとりまく魚類の現存量増加と種組成変化		富永敦(茨城内水試)
4. 霞ヶ浦北浦湖区ワカサギ資源回復計画の内容とその推進状況について		武士和良(茨城県霞ヶ浦北浦水産事務所)
5. 諏訪湖におけるワカサギ調査		川之辺素一(長野水試諏訪)
6. 芦ノ湖の概要と漁業について		大場基夫・橘川宗彦(芦ノ湖漁協)
7. ワカサギ増殖の歴史と変遷ー芦ノ湖		橘川宗彦・大場基夫(芦ノ湖漁協)
第14回「ワカサギに学ぶ会」	開催日:2010年2月4日	開催地:富士吉田市(山梨県環境科学研究所)
1. 地球温暖化が浅い湖沼の漁業生産に与える影響:ワカサギについて		坂野博之(水総研中央水研)
2. 北海道のワカサギ漁業の現状と課題		真野修一(道孵化場)
3. 秋田県におけるワカサギの漁獲状況と八郎湖における増殖		渋谷和治(秋田農林水技セ水産振興セ)
4. 群馬県内の湖沼で漁獲されたワカサギの年齢		品川卓志(群馬水試)
5. 神奈川県のワカサギ漁業及び遊漁の現状と課題について		櫻井 繁(神奈川水技セ内水試)
6. 芦ノ湖におけるワカサギ増殖方法の確立化とその効果		橘川宗彦・大場基夫(芦ノ湖漁協)
7. 諏訪湖のワカサギの状況		上島 剛(長野水試諏訪)
8. 鳥取県東郷池におけるワカサギの現状について		福本一彦(鳥取水試)
9. 山梨県のワカサギ漁業の現状と課題		岡崎 巧(山梨水技セ)
10. 山中湖におけるワカサギ増殖への取り組み		天野洋尚(山中湖漁協)
11. 河口湖のワカサギ復活に向けた取り組み		渡辺 要(河口湖漁協)

* 所属は発表当時

に、地理的な問題から毎年の参加が難しいとの声も多く聞かれようになり、2000年(第7回)からは網走を離れて全国のワカサギ生産地において開催されるようになりました。事務局も6年間に亘って務めた網走水試に代わり、都道府県水試が持ち回りをして務めるようになりました。道外初の開催地となった長野(下諏訪)を皮切りに、茨城(霞ヶ浦)、北海道(札幌)、青森(三沢)、秋田(飯田川)、福島(北塩原)、神奈川(箱根)、山梨(富士吉田)と続き、今後の予定として、本年度は群馬(前橋)、来年度は北海道で開催することになっています。各地の会合では、ワカサギの生態的特性や資源状況、漁業に関する話題を中心にさまざまな情報交換が行われています。最近では、地球温暖化に伴う漁場環境の変化や生態系保全、生物多様性との関連から人工増殖事業のあり方について論議されたこともありました。第8回目の茨城では、開催地のイベント「わかさぎサミット」とタイアップして加工業者や一般市民も交えたパネルデ

ィスカッションが企画され、人と自然の共生を目指して共同宣言が行われました。また、先進的な技術開発の事例として、新たな増殖方法(芦ノ湖方式)が紹介され(第8回～第14回)、この取り組みは「第27回 全国豊かな海づくり大会」びわ湖大会において栽培漁業部門で農林水産大臣賞を受賞しています。このほかにも、本研究会において多くの優れた研究活動が紹介され、後の一連の研究をとりまとめて博士号を取得した研究者も少なくありません。

昨年度には初めて規約が改正されて、当研究会の目的は「ワカサギの資源に関する研究を推進することにより、水産資源の管理技術・有効利用の向上を図る」ととし、組織は「ワカサギに関する研究・指導等を行う都道府県の水産試験研究機関または都道府県が所管する試験研究機関」へと整理されました。しかし、これらはあくまでも事務局の運営をスムーズに継続するための配慮であって、会員外の参加や発表も従来どおりに認められ

ていますので、会合のスタイルにも地域の事情や要望に応じながらバリエーションがあって良いものと思われま

す。

わが国の内水面水産業は、優れた自然環境と水域生態系の要素である生物と水資源によって育まれてきました。ワカサギの生産量はかつて6,000 tを超えた時代もありましたが、最近では1,000 t台にまで減少しています。この原因を考えると地域によりさまざまですが、総じて、人と自然の関わり方を見直す必要性を映し出しているように思えます。人類は自然の恵みなしに生き続け

ることはできません。ですから、内水面水産業には生産の大小だけでは表せない価値があると思うのです。たとえば、流域圏における人間活動と自然環境の調和を図るためのモニターとして役割を担えるかもしれません。あるいは、日本古来の生活や自然観、食文化の伝承を通じて、現代社会に生活の質の向上をもたらす産業へと発展することも期待できるかもしれません。このような新たな価値を具現化するべく、持続可能なワカサギ生産と内水面水産業の実現を目指して「ワカサギに学ぶ会」がこれからも成長し続けて行くことを願ってやみません。